大磯地区に於ける本土決戦期の遺構調査

市原　誠

1.　はじめに

本調査は、2016 年（平成 28 年）に平塚の空襲と戦災を記録する会：藤野敬子氏に先導されたことがきっかけであった。その後、大磯町郷土資料館学芸員：富田三紗子氏も交えて、数回に亘り目視調査を実施した。探求心旺盛な富田三紗子氏は、きちんとした調査を行ないたいのだという。その熱意に筆者が呼応する形で、大磯字坂田山付 1 号壕の調査を実施した次第である。

このことが呼び水となって、大磯町内に現存している本土決戦期の遺構の調査が、本格的に実施されることを願って止まない。

本壕が構築された時代背景を中心に実測図、写真などを掲載して、本年報にまとめさせて頂くこととしたい。

2.　時代的背景

1941 年（昭和 16 年）12 月に始まった日米戦争は、1945 年（昭和 20 年）8 月に終戦を迎えたことは承知の事実であろう。

しかし、終戦を迎えるまでに日米両軍ともに様々な作戦が立案され、最終局面が訪れつつあった事実は、それほど知られていない。それは、史実通りに終戦を迎えているからに他ならない。今日の多くの人達に、あまり語られることのない日米両軍に於ける最終局面の作戦について論じていくこととしよう。

万が一、史実通りに終戦を迎えなければ、相模湾に面している大磯町は、間違いなく有数の激戦地のひとつとして記憶されていただろうと推測する。

1945 年（昭和 20 年）、兵力に勝る米軍は、アイスバーグ作戦を実施し沖縄を占領する。その後、日本本土侵攻作戦として 1945 年（昭和 20 年）11 月にオリンピック作戦、翌年 3 月には、コロネット作戦の発動を予定した。

日本軍としては、これに呼応する形で、それぞれ決 6 号作戦、決 3 号作戦を立案する。米軍の本土侵攻作戦に対して、多大な損害を与えて有利な条件で戦争を終わらせることが目的の作戦である。

大磯地区は、米軍でいえばコロネット作戦、日本軍でいえば決 3 号作戦の作戦地域に該当していた。日本本土では、物資不足が深刻であったが、作戦に対する準備は優先的に実施されていたようだ。

日本側の指揮や作戦事情を少し触れておくと、大本営は内地防衛軍の第 1 総軍、第 2 総軍、航空総軍の戦闘序列を下令し、1945 年（昭和 20 年）4 月 15 日、第 53 軍（通称：断）が名古屋で編成を完結した。第 53 軍の担当防備範囲は、神奈川県のほぼ全域と静岡県の富士川より東の地域である。

それに伴う隷下師団は、当初は第 84 師団（通称：突 1944 年 7 月編成）と第 140 師団（通称：護東 1945 年 2 月編成）の 2 個師団に過ぎなかったが、第 316 師団（通称：山城 1945 年 6 月編成）が追加配備されることとなる。

日本側の本土決戦準備は、当初、縦深配備であったが、1945 年（昭和 20 年）7 月 17 日に、各方面軍に第 1 総軍決戦網領を通達し、水際配備へと作戦変更となった。これによって、相模湾、九十九里浜正面の部隊は、同年 8 月上旬、汀線に主陣地を推進することとなる。

この作戦変更の処置は、1945 年（昭和 20 年）7 月 15 日に沖縄の戦いから奇跡的に生還した森脇大尉が、米軍の艦砲射撃による日本軍の損害は皆無だったと報告したことによる。つまり、硫黄島のような島嶼と違い、沖縄やそれよりも広大な日本本土では、米軍の艦砲射撃の密度が薄くなり、損害はないに等しいと判断したのである。

3.　大磯地区に布陣した部隊と規模

起伏のある大磯丘陵は、米軍の艦砲射撃や爆撃に対する防禦に有効と判断された。そのため、大磯地区には多数の部隊が布陣し、緊要地形の最たる場所と判断できるだろう。

大磯地区は、戦闘序列でいえば第 1 総軍の管轄下にある。総軍の下に第 12 方面軍、第 53 軍と指示、命令系統が続く。神奈川県のほぼ全域が第 53 軍の管轄下にあった。

大磯地区に布陣した具体的な部隊についてであるが、第140師団[1]歩兵第402連隊[2]がメインで、独立重砲兵第36大隊第2中隊[3]、野戦重砲兵第2連隊[4]の一部、東京湾要塞第2砲兵隊[5]、砲兵情報第5連隊[6]などが続く。ほか、横須賀海軍警備隊[7]の一部も布陣していた。

第140師団の師団長である故物部長鉾氏の証言によれば、当初、千畳敷山陣地、鷹取山陣地にそれぞれ1個大隊を布陣させる予定だったようだ。しかし、東京師管の意向だと築城は千畳敷山のみだったとの話し。最終的には、千畳敷山陣地に2個大隊、鷹取山陣地に1個大隊布陣ということに決定したとのこと。

総括して考慮すれば、大磯地区だけで軽く4,000名程度の兵力と考えられるが、詳しい実数は筆者には判らない。

配備火砲などについては、「大東亜戦争　相模湾火力配置図　其の二」を基にすれば、14㎝加農砲2門、12㎝加農砲2門、28㎝榴弾砲2門、24㎝榴弾砲2門、15㎝榴弾砲4門と狭範囲の割に非常に重装備である。実際は、全てが完備される前に終戦を迎えているのは承知の沙汰であるが、これら重砲のほかに山砲や野砲などの火砲配備は更に多かったことはいうまでもないだろうし、鷹取山の山体（平塚市側だが）には噴進砲陣地も構築された。

これらの配備状況を見ると、大磯地区は緊要地形の最たる場所であったことは疑いの余地すらないし、本土防衛の重要な最前線であった。相模湾の他地域の防備と比べても、大磯地区の火砲密度は群を抜いて高かったといえる。

これら日本軍側の防備に対して、来寇を企てる米軍からすれば非常に脅威であったことは間違いないだろう。万が一、上陸作戦が決行の暁には、水際配備に徹した日本軍の作戦を想定していなかった米軍にとっては、ひとたまりもなかっただろう。

本土決戦に関する一連の流れ	
1944年10月中旬	東部軍築城開始命令
1945年1月20日	帝国陸海軍作戦計画大綱
1945年2月28日	第140師団編成
1945年4月	内地防衛軍戦闘序列
1945年4月20日	第53軍創設
1945年5月2日	歩兵第402連隊編成
1945年5月23日	第316師団編成
1945年7月17日	水際配備へ作戦変更
1945年8月15日	玉音放送

また大磯地区には、第140師団歩兵第402連隊が大磯小学校に本部を置いており、故鈴木薫二連隊長がここで指揮を執っていた。連隊とは、3～4個大隊を掌握し、終戦時の歩兵第402連隊部隊配置の詳細は第1大隊が西小磯汀線、第2大隊が二宮地区、第3大隊が千畳敷山だったようだ。第4大隊の布陣場所については鷹取山周辺であった。ほか、新編師団の第316師団の一部も布陣していたが、全部隊が到着する前に終戦となっている。

余談ではあるが、歩兵第402連隊と歩兵第349連隊の関係性を少し述べておくと、第140師団歩兵第402連隊は、1945年（昭和20年）7月頃における第316師団の京都からの進出に伴い、今までの東方（藤沢方面）に第140師団・西方（小田原方面）に第84師団が配備されていたが、その中間地帯の相模川河口付近の地区に、第316師団が配備された。その措置に伴い第140師団歩兵第402連隊は、編成以来、大磯（千畳敷山を含む）に配備され鋭意築城を行なってきた関係上、第316師団に配属され、その代わりに第316師団[8]の歩兵第349連隊[9]が、第140師団に配属され茅ヶ崎海岸に配備された。

しかし、完全に管轄変更が行なわれぬまま、かつ第140師団歩兵第402連隊は、第316師団に配属される予定とされたまま終戦を迎えたともいわれる。この異例の措置は、この地の防衛に強くこだわっていた故鈴木薫二連隊長の強い意思の表れだといい、この気迫に押され所属師団の隷属変更となることとなった。

なお、第140師団歩兵第402連隊だけで、千畳敷、鷹取山、二宮北側、相模平地に終戦までに延べ100,000ｍの坑道を準備完了したというが、大部分は未調査か開発によって消滅している。

ちなみに、終戦時の歩兵第402連隊将校職員表には、第140師団歩兵第402連隊第2大隊は、補助憲兵となったため、故鈴木薫二連隊長の指揮下から欠落している。

4.　大磯地区に本土決戦陣地構築が開始された時期

米軍の日本本土上陸に対する築城開始時期については、多数の一次史料や文献を読み解いたり、偉大なる先賢の方々のご教示から振り返ると、1944年（昭和19年）10月中旬の東部軍築城開始命令が最も古い。

ちなみに、東部軍

というのは、東日本を管轄していた軍司令部で、1945年（昭和20年）2月1日の第12方面軍の編成によって消滅している。

この東部軍築城開始命令伝達時に配備できた兵力は、留守近衛第2師団しか見当たらない。この留守近衛第2師団が相模湾一帯に布陣したことだろうが、その一部が大磯地区にも布陣していたと考えられる。この時期における築城の痕跡などの詳細は不明である。留守近衛第2師団とは、後の第140師団の前身である。

筆者としては、推測の域は出ていないが組織的で本格的な本土決戦準備（築城）は実施していなかったと考える。その根拠としては、この時期（1944年10月）から大磯地区で本土決戦準備を始めていたら完成度の高い陣地があふれていただろう。しかし、現状では半端な作りの陣地が非常に多い。

また、筆者自身が多数の先賢の方々からご教示頂いたことは、どれも翌年4月以降の話しばかりであったことにもよるが、確実にいえることは終戦間際に最も顕著に陣地構築が行われていたことだろう。

参考程度に、実際の6つの事例を述べて大磯町内の各地域にどのような陣地が構築されていったのかを確認していくこととしたい。

①羽白山（坂田山）穹窖式加農砲陣地

羽白山に存在する15㎝穹窖式加農砲陣地の掘削状況や期間を述べておきたい。この加農砲陣地の構築にあたった故内山清治氏によると、砲兵情報第5連隊だけで1945年（昭和20年）5月10日ころから掘削を始めたのだという。当初は三交代だったが、途中から目途が付いたためか日中のみの作業に変更となったと。そして、同年8月上旬には貫通し、コンクリートの吹き付けも完了したとのことだった。直接、掘削作業をしている人員は常に10名程度だったとのこと。

故内山氏によると、陣地の掩砲所にコンクリートを吹き付けても加農砲や砲弾はなかったという。すでに準備されていたという証言もあるが、真相は不明のままである。

②西小磯汀線陣地

故清水孝氏によれば、1945年（昭和20年）8月上旬に進出し西小磯の海岸に陣地構築を始めたという。掘削を始めてすぐに終戦を迎えたとのこと。そのため、照明などの必要もなかったようだ。氏の証言から同年8月10日前後より掘削を開始したのではないかと推測する。構造については、海岸が丘のように丘陵になっており北側から海側に向かって掘削していたとの話しだった。

③羽白山（坂田山）銃眼陣地

箕輪治三氏によれば、1945年（昭和20年）7月前後に、コンクリート不使用の銃眼陣地が複数構築されたという。氏の話しだと西側を射撃できるように掘削したのだとのこと。構造は、それほど複雑ではなかったようだ。氏によると陣地に機関銃などは据えていなかったと。

④阿部銃眼坑道

阿部義明氏（94歳）の証言によると、1945年（昭和20年）6月下旬に着任すると、鷹取山山体に銃眼坑道を構築中であったとのこと。阿部銃眼坑道は、同年7月末には完成していたという。阿部氏率いる小隊38名のみでの作業だった。ちなみに名称であるが、小隊長だった阿部義明氏の了解を得て命名している。

ちなみに氏は、阿部銃眼坑道を竣工させると例の作戦変更に伴い、生沢地区に進出し新たにここで掘削作業を始めたところで終戦を迎えている。

ここでも機関銃などの兵器類は、設置していなかったとの証言が得られた。

⑤寺坂対戦車壕

善波喜代治氏（87歳）によると、1945年（昭和20年）の梅雨明け前ころに、勤労奉仕で対戦車壕構築の手伝いをしたと振り返る。主な仕事は、掘った土を運ぶことだったというが、どこの部隊が主体となって構築したのかは判らないと。

この時期は、第316師団の同地進出はまだであるが、第140師団歩兵第402連隊第4大隊第6挺進中隊第2小隊の40名前後の兵員が寺坂付近に駐屯していたため、この部隊が関与したことだろう。

⑥王城山穹窖式加農砲陣地

勤労奉仕で陣地構築に携わった片野一雄氏（87歳）の証言だと、王城山にも付近の古墳群を破壊して穹窖式加農砲陣地を構築したという。この加農砲陣地は、軌道が敷かれ移動式だったとのこと。恐らく射界を広く取る処置だと思われる。構築部隊は、護東部隊[10]だといい、備砲は警防団員から戦艦長門の副砲だと聞いたと話していた。

以上6つ以外にも多数の事例はあるが、類似したケースのため割愛する。筆者の稚拙な調査ではあるが、いずれの事例も1945年（昭和20年）5月以降で、それ以前の話しは皆無である。このことから、大磯地区に具体的な陣地構築が実施された期日を、同年春以降と判断した次第である。

5. 大磯字坂田山付1号壕の変遷

本壕においては、本来は横井戸として掘削されたと考えられる。その根拠としては、痕跡として戦後に掘削された可能性もあるが、坑道の細さが挙げられる。図面のM付近などは、人がようやく通行できる程度なので、その特徴を良く表しているといえよう。

横井戸の掘削については、日本ではもっとも古い物で江戸時代だといわれており、本壕の掘削時期については、防空壕として掘削されたという証言もあるが明治期前後であろうかと推測する。

当時の日本軍においては、本土決戦陣地を構築するにあたり古墳や横井戸など、利用できる坑道を掘削していたことが知られており、中郡二宮町内や大磯町郷土資料館近辺に、同様の遺構が確認できる次第である。その理由としては、少しの努力で陣地として利用できるからに他ならない。無論、古墳や横井戸をそのまま活用する訳でなく、それを土台に使いやすいように拡張するわけである。本壕についても、横井戸をそのままの状態で活用を検討していた訳ではなく、当然、拡張して防空壕や陣地壕としての機能を考慮した痕跡が見て取れる。本来、横井戸として掘削された細い坑道も、容易に人員の往来が可能な程度に拡張したことと判断し、さらに棲息部も伴い長期的な使用にも耐えられるよう改造したと考える。

本壕付近で 2018 年 5 月 8 日に、戦時下の二宮を記録する会：藤田尚志氏、富田三紗子氏と共に聞き込み調査を試みたところ、存在を知っている人もあったが、初耳だという人の方が多かった。存在を知っている人の中で、真壁泰由氏（76 歳）によれば、空襲の際、本壕に避難していたところ、火災の煙が壕内へ充満するため、兵隊に抱かれて外へ出たことがあるという。終戦 74 年を迎えようとしている今日では、聞き込み調査でこれに勝る証言は出て来なかった。

少し以前に、富田氏、藤野氏の調査で近隣住民も本壕へ避難したことも判っている。氏らの調査によれば、本壕は故加藤正治氏（中央大学初代総長）の別荘宅の裏側にあったとのことで、内部には書庫もあり電気も通っていたようだ。有事の際は、あらかじめ本壕へ避難することが決まっていたとの話しだった。この事実は、当時の情報誌 (11) でも同様のことが推奨されており、戦争末期の常識だったといっても過言ではない。ちなみに、ここでの証言についても、避難の際に兵隊の動向が出現している。

大磯字坂田山付 1 号壕の中に書庫があったというのは、湿気もあるため今日の常識では理解しがたいケースであるが、特筆すべきは兵隊の存在だ。これは明らかに、当時の日本軍が掌握していた証拠といえよう。すぐ近くの大磯小学校には、歩兵第 402 連隊が本部を置いており、日本軍の影響下にあったのは当然の成り行きであろうと考えられる。

本壕付近は、歩兵第 402 連隊第 3 大隊の布陣地域ということが判っているが、この第 3 大隊は、第 7、8、9 中隊と第 3 歩兵中隊、第 3 挺進中隊の 5 コ中隊を伴っていることも判っている。万が一、本壕を日本軍が使用することを考えていたのなら、壕の大きさから大隊指揮壕とは考えにくく中隊指揮壕規模と推測する。前出の 5 コ中隊のいずれかが指揮壕としての使用を考慮していた可能性は捨てきれない。これ以上の究明については、この壕に直接、携わった先賢の方々からのご教示は得られないので不明のままである。いつの日か筆者に代わって、未来の人達が歴史の真実を究明されることを願って止まない。

6. 大磯字坂田山付 1 号壕の詳細・現状

2016 年（平成 28 年）8 月から、10 回程度の内部調査を実施した。図面Ａ、Ｆ、Ｐ、Ｔ付近には綺麗に掘削した石が使用されており、図面ＣやＤ付近は、水溜のようでこの辺りのみコンクリートが吹き付けられている。

図面Ｅ付近より数m北に進むと、本壕最大級の崩落跡が確認できる。今後、崩落現象はさらに激しさを増し、そう遠くはない将来、往来が不能になってしまうかも知れない。図面Ｅ付近から北へ 20 m近く進むと分岐点に差し掛かるが、実測作業当時は常に湧水が降雨のように天井から降り注いでいた。分岐点より北や東にも通路はあるが、ようやく人の往来が可能な程度の広さしかなく、ここは横井戸のままと考えられる。この程度の広さで坑道陣地としての使用を考慮したとは考えにくい。

図面ＦからＨにかけての通路は、綺麗に掘削されて天井部は戦後のものと思われる金属製のトタンで補強され馬蹄形を呈する。Ｋ付近から南へ 10 m弱辺りには、電動ポンプや配管やマス状の水溜が見て取れ、本壕が横井戸であることを窺わせる。現在も池へ湧水を供給する横井戸として使われているようだ。図面Ｐは、棲息壕と思われ、ここは中隊長クラスの将校が指揮を執る場所だったのであろうか。壁も天井も綺麗に仕上げてある。この部屋に錆びないアーチ型のトタンが転がっていた。近隣住民の証言に出現する書庫とは、ここの部屋だと思われる。

図面ＲからＳにかけては、Ｌ字型を呈しており、この掘削の手法は、爆風が壕内に直接、入り込まないための処置に他ならぬ、本壕が旧日本軍によって掘削されたと推定できる。1945 年（昭和 20 年）の終戦までの間に、掘削、拡張工事が行なわれていたと考える。図面Ｔ付近も掘削された石が使われ補強されていた。ちなみに、この石積みは 1948 年（昭和 23 年）撮影の写真で確認することができ、空襲で焼失した建物の屋根跡が焦げ付いている。この事実は、終戦時に、この石積みが既に存在していた裏付けとなる。史実通りに戦争が終了しなければ、更なる掘削工事がなされたことは想像に難しいことではない。

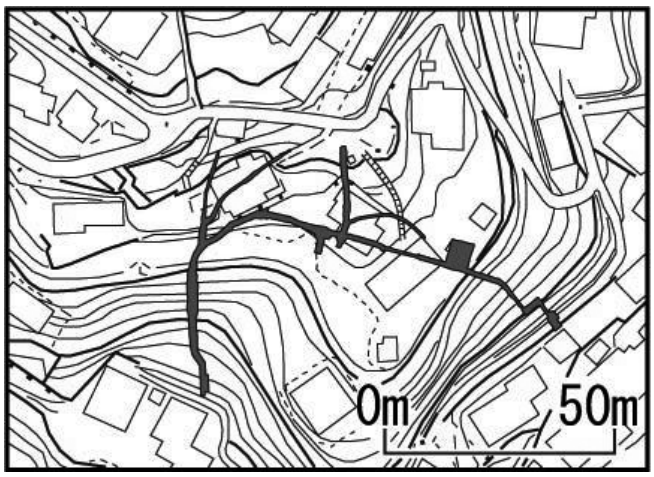

図 2　大磯字坂田山付 1 号壕　位置

写真 2　図面Ａ付近

2016.12.11 撮影

写真 3　図面Ｂ付近

2018.5.8 撮影

写真 4　横井戸を物語るポンプ

2018.5.8 撮影

写真 5　図面Ｆ付近

2018.5.8 撮影

写真 6　図面Ｓ付近

2018.5.8 撮影

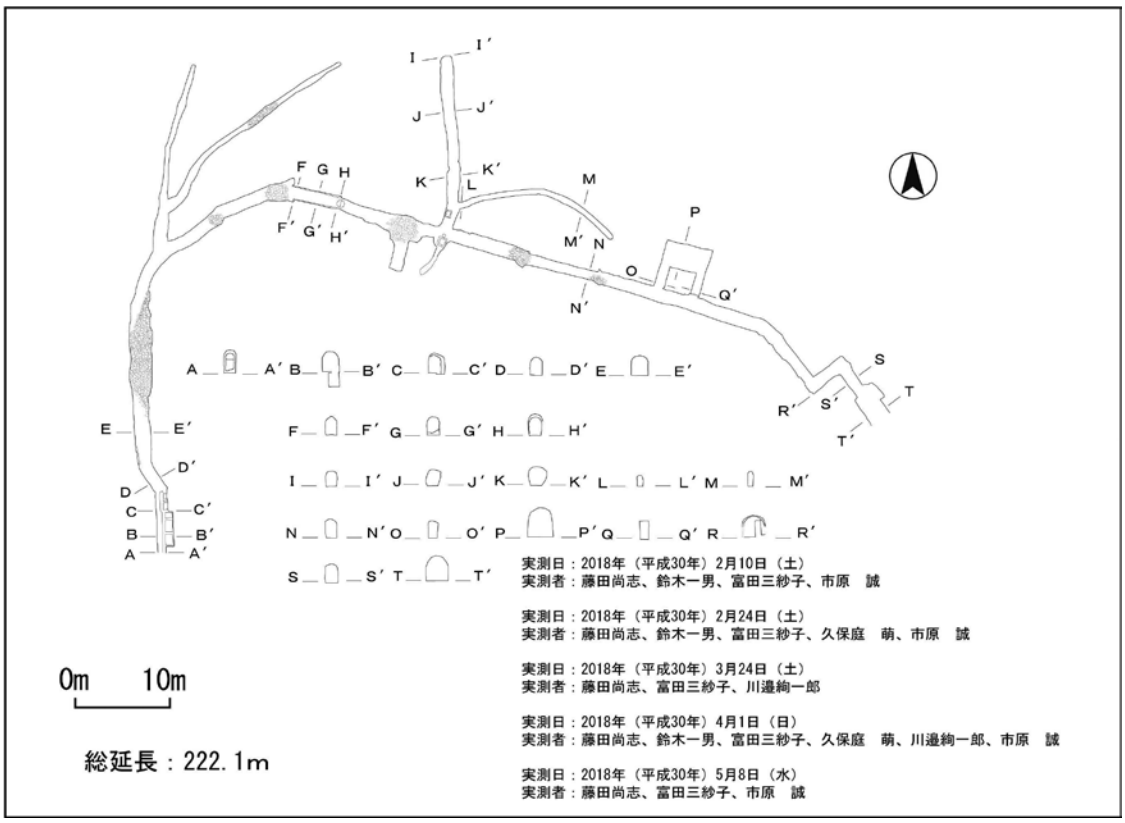

図 3　大磯字坂田山付 1 号壕　実測図

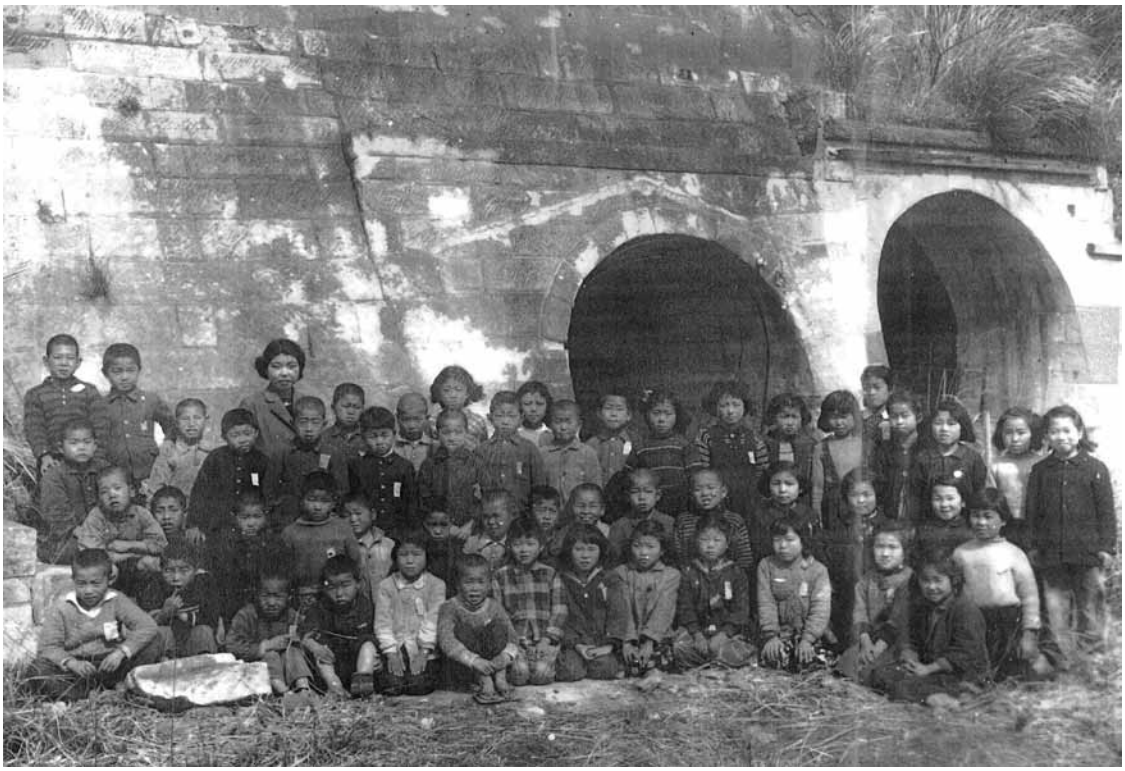

写真 7　大磯字坂田山付 1 号壕前で撮影された大磯小学校児童の集合写真　1948 年撮影

この写真は、1990 ～ 2000 年代に大磯町内の歴史や民俗を調査していた「摘み草の会」が、町内の空襲被害をまとめたポスターを作成した際に使用した写真です。現在は、写真の所蔵者が不明となっています。この写真についてご存じの方がいらっしゃいましたら、情報のご提供をお願い致します。

謝辞
本稿の執筆にあたって、稲木静恵氏、平松佳世子氏、平松祐子氏、真壁泰由氏に、調査をご協力いただき、諸事ご教示いただいた。記して感謝申し上げる。

主要参考文献

・第 1 復員局『歩兵第 402 連隊　職員表』1945 年
・防衛庁防衛研究所戦史室編『戦史叢書・本土決戦準備 1　関東の防衛』朝雲新聞社　1971 年
・清水　孝『第 100 師団（鉄兵団）士官候補生・第 140 師団（護東兵団）新品少尉相集い共に大いに語らん哉』2000 年
・市原　誠『近代戦跡考古学 7（軍装操典 74 号）』2003 年
・市原　誠『近代戦跡考古学 28（軍装操典 113 号）』2013 年
・市原　誠『近代戦跡考古学 39（軍装操典 126 号）』2016 年
・市原　誠『平塚市博物館研究報告　自然と文化 34 号』2011 年
・家村和幸『大東亜戦争と本土決戦の真実』並木書房 2015 年

注

(1)　陸軍師団のひとつ。1945 年（昭和 20 年）2 月 28 日に東京で編成。司令部は片瀬にあった。通称：護東部隊。
(2)　1945 年（昭和 20 年）5 月 2 日に甲府で編成された。
(3)　1945 年（昭和 20 年）2 月 15 日編成。大磯地区には、24㎝榴弾砲 2 門が布陣。
(4)　1919 年（大正 8 年）静岡県三島で編成。1945 年（昭和 20 年）5 月に満洲から日本本土へ呼び戻された。大磯地区には、15㎝榴弾砲 4 門が布陣。
(5)　1945 年（昭和 20 年）2 月 15 日編成。大磯地区には 28㎝榴弾砲 2 門が布陣。
(6)　1945 年（昭和 20 年）5 月に満洲から日本本土へ呼び戻された。
(7)　上級司令部は、横須賀鎮守府。
(8)　本土決戦第 3 次兵備で 1945 年（昭和 20 年）5 月 23 日に、京都で編成された。俗称は、山城部隊。
(9)　1945 年（昭和 20 年）7 月中旬、京都で編成された。
(10)　第 140 師団の俗称。
(11)　内閣情報局　週報委員会が刊行した戦意高揚を目的とした「週報」という情報誌。第 1 号は、1936 年（昭和 11 年）10 月 14 日刊行となっている。確認できるのは、第 452 号の 1945 年（昭和 20 年）8 月 29 日刊行分までとなっており、戦争末期には合併号も多く刊行されたようで必ず週刊ではなかったようだ。戦災により配本できなかった号もあったらしい。一般に広く出回っていたようで、阿部義明氏は、1942 年（昭和 17 年）～ 1944 年（昭和 19 年）まで購読をしていたとのことである。